

2017年度 入学試験問題

国 語

(帰国生入試)

[注意事項]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。ア 世界と自分をはつきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば、人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。イ このことが、人間、とりわけ若い皆さんが世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。ウ、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、（孤独ではあるけれども）自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

しかし、現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを アゲてみればわかる。エ、言葉を知らなければならない。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならぬ。物理学も工学も カカセない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした コウサクや狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学ばきれない。人間は学ぶべきことを、ヤシすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「新生ニューロン」という神経組織を生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競つ

ているという。

たしかに、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという点、現実はそのようになっていない。実は新発見というものは、発見者が一五〜一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年に^③なにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨髄化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位」が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は1の[※]平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三〇年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を發明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気^かが形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。

何かを学んでいこうとするとき、「好き」という感覚ほど強い味方はない。一方、「嫌い」という感覚は、学びにブレーキをかける。好きなことはいくらでもできるが、嫌いなことはやりたくない、と。加えて、好きや嫌いという感覚は個人的な感覚だから、誰かに「私はリンゴが好きだ」と言ったとしても、「それは君が好きなだけ、僕はバナナが好きだ」と返される場合が少なくない。好き嫌いは何かをブロックしてひとりよがりな世界を生み出すことがあるのである。

しかし、内面でわき起こる好きや嫌いは、大切にしなければならぬ。それが人生をつくっていくのだから。だが何かを本当に学ぶためには、好き嫌いの感覚を、さしあたり^eテイシして、どうして好きなのか、どうして嫌いなのかを正視しなければならぬ。矛盾していると思うだろう。しかし、数学の勉強が嫌いなら、どこが好きでどこが嫌いなのかを考えてみてほしい。考えることが、単なる好きや嫌いの感覚から距離を置くことを教えてくれるから。それが学ぶことの第一歩。

今のうちにその術を身につけてほしい。好きだから、嫌いだからで終わってはいけない。

学ぶためのもう一つのポイントは、全体を見ること。それと同時にどこか一点を見なければならぬ。全体だけを見ていても絶対に自分のものにはならない。これも矛盾していると思うだろう。だがスポーツを想像すればわかりやすい。スポーツは単に肉体の問題ではない。例えば野球では、筋力を鍛えさえすればホームランを打てるわけではない。筋力だけでなく、身体全体を考え、何かポイントをつかむことでバッターとして成長できる。人はそれぞれ「癖」を持っているものだが、それを捨て、自分なりのポイントをつかむことが基本だ。

④これは思考の基本でもある。人間がものを考えるとき、公理から出発することはありえない。全体のコンテキストをぼんやりと視野に入れながら、その中で手がかりを見つけて考えを進める。A∥B、B∥C、C∥Aといったような論理は、考え抜いたあとで、他者に説明するために組み立てる表現だ。事件現場に立つシャーロック・ホームズを想像してほしい。彼は、現場全体を見ながら、頭の中ではそれまでに集めた証拠品のイメージや証言を繰り返していることだろう。全体を見ながら、どこかに特異点を見いだそうとしているのである。さまざまな要素があり、それらがどういふ関係にあるのか、そしてそれらの関係がどう全体をかたちづけているのかを見ていくのである。

こうした思考は、数学でも国語でも、研究でもビジネスの現場でも変わらない。「文科系と理科系ではアタマの使い方が異なる」などと思いついてはならない。原則は同じなのだ。文章全体を見ていながら、どこかに必ず文章全体にかかわるひっかけがあるはずだ。それをつかむ。そのポイントを自分なりに展開することで人間はものを考え始めることができる。学校の勉強には正解が用意されている。皆さんが誤った答案を書けば、間違いを指摘される。だが皆さんに課されているのは、正解を知ることではなく、頭の働かせ方を学ぶことだ。この学びは、たんに知識を蓄えることではなく、自分自身を変えていくことにほかならない。全体のコンテキストがあり、その特異点をつかんで全体をもう一回つくり直す。これは自分の世界を自分でつくり直していく力でもある。

(小林康夫『学ぶことの根拠』より)

※海馬……脳の内部にある古い大脳皮質部分。欲求・本能・自律神経などの働きとその制御を行う。

※メカニズム……しくみ。

※平方根……その数同士のかけてaになる数を、aの「平方根」と呼ぶ。

※コンテキスト……文脈。

※シャーロック・ホームズ……イギリスの推理小説に登場する主人公で、世界的に名を知られている優秀な探偵。

問1 ——線 a ～ e のカタカナを漢字に直さない。ただし送り仮名等が必要な場合にはあわせて答えなさい。

問2 空らん

ア

 ～

エ

 に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-------|--------|--------|--------|
| 1 | アⅡまず | イⅡおそらく | ウⅡいわば | エⅡ例えば |
| 2 | アⅡまず | イⅡいわば | ウⅡ例えば | エⅡおそらく |
| 3 | アⅡいわば | イⅡ例えば | ウⅡおそらく | エⅡまず |
| 4 | アⅡいわば | イⅡおそらく | ウⅡ例えば | エⅡまず |

問3 ——線①「人間は、鳥や魚と同じような意味では『自然（＝世界）』の中に生きていない」とありますが、どういうことですか。それを説明した次の文の空らん「A」「B」にあてはまることばを文中からそれぞれ二字でぬき出しなさい。

人間は自分と世界との間に「A」を感じているため、ほかの動物のように「B」することができないが、自由に世界を学び、つくり替えている。

問4 ——線②「現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ」とありますが、筆者はどのような点が「あまりに高度で複雑」だと述べていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 昔の人間とは比較にならないほど多くのことを自然から学ばなければならない点。
- 2 人間がこれまでつくり出してきたさまざまな学問体系まで学ばなければならない点。
- 3 大型機械導入のための技術開発に加えて世界中から資源を集めなければならない点。
- 4 世界の仕組みを文章に残して歴史の一部として後世に伝えていかなければならない点。

問5 ——線③「なにかの『種』」とありますが、筆者は友人の物理学者の例では、この「種」は何であったと考えていますか。次の「

--

」に入ることばを、文中から十二字でぬき出しなさい。

虚数単位に対して持ち続けた「

--

」。

問6 この文章で筆者が述べている内容に合うものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分が知らないことを恥じて謙虚けんきょに知識を積みかさねると、世界をつくり替えられる。
- 2 自然に閑して学んで常識を身につけると、知らないことによる失敗を防ぐことができる。
- 3 単なる好き嫌いの感覚から離れて好き嫌いの理由を冷静に考えると、学ぶ道が開ける。
- 4 アクシデントを避けようとして工夫するその過程で、新発見がなされることが多い。

問7 ———線④「これは思考の基本でもある」とありますが、筆者はどんなことが「思考の基本」であると述べていますか。「癖」「全体」ということばを使って四十字以内で答えなさい。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学六年生の「僕」は、周囲の低い評価のため自分に自信を持っていない同級生の草壁を気かけ、彼に対する周囲の先入観を崩したいと画策していた。ある日、打点王であるプロ野球選手が学校の体育館で講演を終え、翌日野球教室を開催してくれることになった。帰ろうとする選手の後を追いつ、彼の許可を得て同じタクシーに乗り込んだ「僕」と安斎は、野球教室で草壁のスウィングを見て「素質がある」と褒めてやってほしいと懇願して、何とか受け入れてもらった。

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は典型的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく、前日とは打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する生徒はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りの練習をした。

担任教師たちのいく人かは腕に覚えがあるのか、生徒たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であったから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、恰好い」と女子生徒から声上がり、僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになった。

安斎も、僕と似たり寄つたりの、情けないスウィングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい組体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

打点王氏は真面目な人だったので、形式的に「ア」歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧にアドバイスをした。

僕たちのいるあたりには、一時間してからやっと来た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んできた二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらんと声をかけてくる。」

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウエア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りはできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がよいよいよ、^②本来の目的に向かい、一步踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁という生徒がいること自体、忘れていた気配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと、緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やってごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず、注意をした。

草壁は「イ」背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても、不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「オカマの草壁」と囃した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱ってもよし」と決めている節はある。

安斎は縋るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはつきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙って」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった。ウウしているかどうかも分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよく臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきつい

です」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分
かり、^③ 僕は気が気ではなかった。

打点王氏のほうはといえば、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を氣
に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、すつと構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かっ
た。

先入観を、と僕は念じていた。そのバットで、吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、
草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではな
かった。むろん、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べ
ればはるかに良くなっていたが、目を瞠るほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

エ うなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらに、風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた^④ 首だけで答えかけたが、すぐに、
「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったこと
ありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に[※]一瞥をくれ、久留
米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と大きな、透明の
風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの生徒たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉
を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、肚の中から
光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指
先にまで辿り着く、充足感があつた。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういふ顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたの
かもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ち

の高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞せりふを発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々たんたんといなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」[※]佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押たいこばんおされたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、乗りかかった舟、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力かくを実際に見抜いたのか、いやもしかすると、豪放磊落ごうほうらいらくの大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

念押しする口調が可笑おかしかったから、いく人かが笑った。場が和んだといえは、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服しょうふくできぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆっくりと、「僕は、そうは、思いません」と言い切った。

安斎の表情がくしゃっと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、^⑥僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

(伊坂幸太郎『逆ソクラテス』より)

※切っ先……刃物はもののとがった先の部分。

※一瞥……ちらつと見ること。

※佐久間……同じクラスの女子。先生や生徒のみんなから信頼しんらいされていて、僕たちとも仲が良い。

※豪放磊落……気持がおおらかで小さなことにはこだわらない様子。

問1 空らん に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|--------|
| 1 | アⅡふらふらと | イⅡぴくつと | ウⅡむつと | エⅡこくりと |
| 2 | アⅡむつと | イⅡぴくつと | ウⅡふらふらと | エⅡ深々と |
| 3 | アⅡふらふらと | イⅡむつと | ウⅡぴくつと | エⅡこくりと |
| 4 | アⅡむつと | イⅡふらふらと | ウⅡぴくつと | エⅡ深々と |

問2 — 線①「腕に覚えがある」とありますが、これはどのような様子を表しますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分も仲間に入りたがっている様子。
- 2 自分の技術を試したがっている様子。
- 3 自分のストレスを解消している様子。
- 4 自分の能力に自信をもっている様子。

問3 — 線②「本来の目的」とありますが、これについて次の各問いに答えなさい。

I 「本来の目的」を説明するとどうなりますか。次の文の空らん「A」「B」にあてはまることばを、「A」は五字で、「B」は九字で、それぞれ文中からぬき出しなさい。

打点王氏に草壁の「A」を見てもらい、「B」と褒めてもらおうこと。

II 「本来の目的」を遂げたことをきっかけに「僕」の気持ちが変化したことを、印象的に表している一続きの四文を探し、その初めと終わりの五字をぬき出しなさい。

問4 — 線③「僕は気が気ではなかった」とありますが、これはどんな理由からですか。次の文の空らん「A」「B」にあてはまることばを、「A」は五字で、「B」は二字で、それぞれ文中からぬき出しなさい。

安齋が久留米先生に対して反発し、「A」を向け続けるような態度をとったため、二人の間に「B」が散っているから。

問5 ——線④「首だけで答えかけた」とありますが、これはどのような動作を表しますか。
「……かけた」に続くように、文中から四字でぬき出しなさい。

問6 ——線⑤「僕は、そうは、思いません」とありますが、これをくわしく言いかえるとどうなりますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 僕は、自分がプロの野球選手になれるとは、思いません。
- 2 僕は、ほめ言葉を自分が本気にするとは、思いません。
- 3 僕は、自分がお世辞を言われたのだとは、思いません。
- 4 僕は、努力すればいい選手になれるとは、思いません。

問7 ——線⑥「僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ」とありますが、このときの「僕」はどう思っていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 調子に乗った草壁がうぬぼれを強くして久留米先生の言葉を否定し、周囲をびつくりさせたことにあきれてしまっている。
- 2 自信を持った草壁が堂々と自分の意見を言って久留米先生に反発し、周囲の先入観をこわしたことをうれしく思っている。
- 3 自分がほめられたことを信じない草壁が久留米先生に不満をぶつけ、周囲を動揺どうようさせたことに驚いて苦々しく思っている。
- 4 自分を冷静にとらえている草壁が久留米先生をたしなめて、自分への先入観など無意味だと証明したことに感心している。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。(表記を現代かなづかいに改めました。)

春の河

山村 暮鳥

たつぷりと

① 春の河は

ながれているのか

いないのか

ういている

藁くずわらのうごくので

それとしられる

おなじく

春の、田舎いなかの

大きな河をみるよろこび

そのよろこびを

ゆったりと雲のように

ほがらかに

飽あかずながして

それをまたよろこんでみている

おなじく

② たつぷりと

春は

小さな川々まで

あふれている

あふれている

『山村暮鳥全集第一卷』より

問1 この詩の文体・形式を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文語定型詩
- 2 口語定型詩
- 3 文語自由詩
- 4 口語自由詩

問2 ——線①「春の河」とありますが、作者は「春の河」の流れのどのような様子をうたっていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 水の流れがすっかり止まっている様子。
- 2 水がとてもおだやかに流れている様子。
- 3 水が河の外に少しづつあふれている様子。
- 4 水が勢いよくどんどん流れている様子。

問3 ——線②「たっぷりと」は、満々と水をたたえた「春の河」の豊かさを表すことばですが、そのような「春の河」と、それをながめる作者、両者に共通したおおらかな様子を表すことばを詩の中から二つ、それぞれ五字でぬき出しなさい。

問4 この詩の表現の特徴として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 同じことばを目立たせたりくり返したりすることで、内容が強調されたり、全体にリズムが生まれたりしている。
- 2 呼びかける表現が多く用いられることで、作者の思いが直接伝わってきたり、読者が親しみを感じたりしている。
- 3 たとえの表現が多く使われることで、風景の印象が強まったり、全体のイメージに広がりが出たりしている。
- 4 大事なことばをわざと省くことで、読者の想像力をかき立てたり、全体に深い余韻を残したりしている。

